

令和 3 年度
北大産婦人科同門会・W I N D
学術講演会

プログラム

日 時：令和 3 年12月18日(土) 午後 2 時30分より

会 場：札幌パークホテル

札幌市中央区南10条西 3 丁目 TEL 011-511-3131

北大産婦人科同門会
主 催 北大医学部産婦人科学教室
一般社団法人 W I N D

学術講演会「エメラルドA」3階 午後2時30分～5時00分

1) 学位取得者講演

座長 北大産婦人科同門会

会長 大久保 仁

「子宮体癌の個別化治療を目指した臨床病理学的検討」

北海道大学病院 婦人科 朝野 拓史

2) 「教室一年の歩み」

北海道大学医学部産婦人科学教室

① 臨床統計

婦人科 病棟医長 遠藤 大介

産科 病棟医長 馬 詰 武

新生児 周産母子センター准教授 長 和 俊

生殖内分泌 産婦人科准教授 工藤 正 尊

② 行事・会員動静

WIND 幹事長 金野 陽 輔

③ 研究業績・学会・論文発表

婦人科助教 金野 陽 輔

3) 新入会員紹介

WIND 幹事長 金野 陽 輔

4) 特別講演

座長 北海道大学大学院医学研究院 産婦人科学教室

教授 渡利 英 道

「卵巢癌治療の現在と展望」

東京慈恵会医科大学 産婦人科学講座

主任教授 岡本 愛 光 先生

「子宮体癌の個別化治療を目指した臨床病理学的検討」

北海道大学病院 婦人科

朝 野 拓 史

子宮体癌は婦人科悪性腫瘍の中で罹患数が最も多い疾患であり、治療の個別化が望まれている。今回、術後治療の個別化に寄与することが推察されている L1 cell adhesion molecule (L1CAM) の発現状態と予後との関連を検討した。リンパ節郭清を含む根治手術を実施した観察期間が36カ月以上の161例を対象に、組織マイクロアレイを作成し L1CAM の発現を免疫組織化学法 (IHC) で検討した。L1CAM 高発現は、非類内膜癌、静脈侵襲、腹腔細胞診陽性と有意に関連し、再発中・高リスク群で術後化学療法を施行した症例では有意に予後不良だった。多変量解析により、L1CAM 高発現は傍大動脈リンパ節転移を含むリンパ節転移陽性ととも独立予後不良因子であることを明らかにした。L1CAM 高発現は漿液性癌など術前診断が困難な組織型の早期診断マーカーとなる可能性があり、さらに、L1CAM 高発現症例では補助化学療法を用いても予後不良であり、新規の治療戦略を開発する必要があると考えられた。

「卵巣癌治療の現在と展望」

東京慈恵会医科大学 産婦人科学講座

主任教授 岡 本 愛 光 先生

進行卵巣がんの予後は残存腫瘍の有無と相関することから、手術は肉眼的に残存腫瘍径をゼロにする R0 完全手術 (Complete surgery) を目指した最大限の腫瘍減量手術を行うのが原則である。われわれは全壁側腹膜切除術を行いさらなる予後向上を目指している。初回の完全摘出手術が術前に不可能と予想される症例は積極的に診断的腹腔鏡検査を導入している。完全摘出手術が不可能と判断した症例や合併症例・全身状態が不良な症例に対しては周術期合併症などの観点から術前化学療法 (NAC) 数コース施行後の interval debulking surgery (IDS) の有用性も報告されている。NAC が奏功した症例に対し腹腔鏡手術 vs 開腹手術を比較する LANCE (Laparoscopic cytoreduction After Neoadjuvant Chemotherapy) trial が進行しており、将来、進行卵巣癌手術において低侵襲手術が導入される可能性もある。いずれにしても時期によらず手術を行う際は Complete surgery が原則である。

薬物療法に関しては、1st line や2nd line 以降にも血管新生阻害剤や PARP 阻害剤が用いられる時代となり、さらに免疫チェックポイント阻害剤やがんワクチン療法も組み入れた臨床試験が世界中で行われている。また、2009年に世界中で注目された JGOG3016 試験の Dose dense TC が再び注目されつつあり、特に PARP 阻害剤との combination は興味深い。今後の卵巣がんの薬物療法は BRCA や HRD をバイオマーカーとした分子標的治療薬が中心となっていくが、Rare tumor に分類されるが日本人に多い明細胞癌の新しい治療戦略はぜひ日本から発信されることを期待したい。本講演では卵巣癌治療の現在と Gynecologic Cancer Intergroup (GCIG) などで国際的に注目されている臨床試験も紹介する。

略 歴

岡 本 愛 光

昭和61年3月 東京慈恵会医科大学 卒業
昭和61年6月 東京慈恵会医科大学産婦人科講座研修医
昭和63年5月 東京慈恵会医科大学産婦人科講座助手
平成元年4月 財団法人がん研究振興財団リサーチレジデント
平成2年2月 国立がんセンター研究所がん転移研究室研究員
平成3年4月 東京慈恵会医科大学産婦人科講座助手
平成4年12月 Laboratory of Human Carcinogenesis,
National Cancer Institute,
National Institutes of Health, Bethesda, MD.
U.S.A.
Guest Researcher (米国国立がん研究所招待研究員)
平成7年2月 東京慈恵会医科大学産婦人科講座助手
Laboratory of Chemoprevention,
National Cancer Institute,
National Institutes of Health, Bethesda, MD.
U.S.A.
Guest Researcher 兼任
平成9年4月 東京慈恵会医科大学 DNA 研究所遺伝子治療部門兼任
平成13年6月 東京慈恵会医科大学産婦人科講座講師、診療医長
平成21年2月 東京慈恵会医科大学産婦人科講座准教授
平成24年4月 東京慈恵会医科大学産婦人科講座主任教授
現在に至る